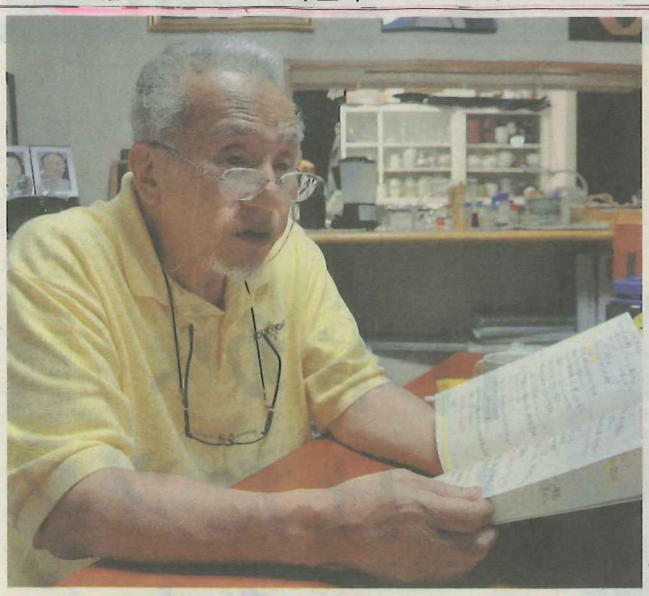
尊厳死巡りスイスで演説

富山の松尾さん　寝たきりの妻の生活語る

妻が交通事故で全身まひとなり、寝たきりの生活を強いられている、富山市の松尾幸郎さん(76)が先月、スイスで開かれた「世界尊厳死大会」に日本代表として出席し、スピーチを行った。大会で、尊厳死が先進国で重要な課題と受け止められ、日本だけが取り残されている印象を受けたといい、「尊厳死の法制化に向け、より活発な議論が必要だ」と話す。

(池本佐恵)



「日本で尊厳死の議論は遅れている」と語る松尾さん（富山市の自宅で）

6月14日。スイス最大の都市チューリヒのホテルの会議場。松尾さんは、世界25か国46団体の代表約100人を前に、日本での尊厳死を巡る議論や妻の巻子さん(68)との生活について、英語で15分間スピーチを行った。互いを見つめ合い、会話補助器を使って意思疎通を図る夫婦の様子をスライドで紹介すると、会場は拍手に包まれ、「感動した」「涙が出た」と何度も握手を求められた。

巻子さんは2006年7月、交通事故で寝たきりとなり、6年間、横隔膜を人工的に動かして呼吸することで命をつないでいる。声も出せず、松尾さんとの会話は、唯一動かせるまぶたでまばたきをして、文字盤に一文字ずつ光るひらがなを示す。「しにたいの」。ここ数年、そういうことが増えた。

「私が先に死んだら妻はどうなるのか」。2人の子供は外国で暮らす。松尾さん自身、昨年、膵臓(すいぞう)の3分の1を摘出する手術をし、体力に不安を感じるようになっていた。「自分が死んだら、妻の意志で死なせてやりたい」

尊厳死について独自に調べを始め、日本尊厳死協会(東京)に入会。痛みを緩和する医療を受けつつ、過度の延命措置を拒否して穏やかな最期を迎えることを求める「リビングウィル(尊厳死の宣言書)」に署名した。巻子さんも、松尾さんの考え方に理解を示しているという。

尊厳死の法制化を巡っては、2005年、超党派の国会議員約110人で作る「尊厳死法制化を考える議員連盟」が発足し、日本尊厳死協会や日本医師会などと協議を進めてきた。「延命措置」や「末期」といった言葉の定義について議論が長引き、今年3月、初めて法案がまとまった。だが、難病患者の家族などからの反発もあり、国会に提出はされていない。

松尾さんは「我々夫婦に起きたことは、だれにでも起こりうる。みんなが自分のこととして、尊厳死について考えてほしい」と話している。

「しかし、現代の日本では忘れられてしまっているのうに、名誉と尊厳をもって死ぬのは我々の伝統。しです」